

エル・カミーノ・レアル ―ラテン・ファンタジー―

(アルフレッド・リード)

アルフレッド・リード(1921～2005)はアメリカの作曲家で、吹奏楽の世界では 20 世紀を代表する作曲家の一人とされています。第二次世界大戦のころから最晩年まで作品を書き続け、おびただしい数の作品が残されています。日本では多くの中高生によって演奏されるだけでなく、NHK 交響楽団管楽セクションが演奏する「アルメニアン・ダンス・パート I」や「エル・カミーノ・レアル」がテレビで放映されるなどしています。また、関西圏では、MBS 毎日放送のオープニング（早朝の放送開始）とクロージング（深夜の放送終了）にもリードの「ミュージック・イン・ジ・エア―！」という美しい作品が使われています。

さて、この「エル・カミーノ・レアル」は 1985 年、リードが 64 歳のときの作品です。アメリカのジョージア州ロビンズ空軍基地の第 581 空軍軍楽隊（当時）と指揮者のレイ・トウラー中佐の委嘱で書かれました。このころのリードは、マイアミ大学でウィンドアンサンブルを指揮する傍ら、日本に訪れる機会も増え、コンサートや講師、審査員などを務めていました。作風もオーケストレーションの幅が広がり、旋律への傾倒が見られるようになりました。現在の日本でよく演奏されている彼の作品はほぼこのころの作品で、「春の猟犬」(1981)、「ゴールデン・ジュビリー」(1987)などがあります。この作風がのちの「第三交響曲」(1988)や「エルサレム賛歌」(1988)などの大作へとつながっていきます。

タイトルの「エル・カミーノ・レアル」とはスペイン語で「王の道」を意味しています。16 世紀の半ばごろ、スペインやポルトガルが太平洋沿岸の土地を自国の植民地にするべく、開拓を行っていました。ポルトガルから日本に鉄砲が伝わったのもこのころです。スペインはフィリピンや中南米を拠点にその開拓を開始しました。メキシコから太平洋沿い、今のカリフォルニア州のあたりを北上しながら開拓を行い、その開拓した経路を彼らは「エル・カミーノ・レアル」と呼びました。リードはこの道に思いをはせ、諸国の国王の行列の情景を思い浮かべて、この作品を作ったと述べています。

作品はコーダを伴った A・B・A の三部形式で書かれており、多くのスペイン的な要素が組み込まれています。速い主部は三拍子の急速な舞曲であるホタの形式、ゆっくりとした中間部はにぎやかな 3 拍子の舞曲であるファンダンゴの形式が素材として用いられています。当然、スペイン特有の八音音階や和声、カスタネットやタンバリンといったリズム楽器が多用され、中間部のハープの伴奏にはギターのように演奏するように書かれたりもしています。さしずめ 10 分間の小さなスペイン旅行といったところでしょう。

シンフォニック・レクイエム (第七交響曲) 作品 135

(ジェイムス・バーンズ)

ジェイムス・バーンズ (1949～) はアメリカの作曲家で 2015 年までカンサス大学で作曲と音楽理論を教えていました。日本では 1980 年代前半に「祈りとトッカータ」や「アルヴァマー序曲」, 「アパラチアン序曲」などが紹介されました。これらの作品は当時の中高生の心をぐっとつかみ、それ以来およそ 30 年間、幅広い世代に愛されて続けています。この間、プロの吹奏楽団が作品集を製作したり、二つの交響曲が世界初演されたりと日本の吹奏楽シーンにはなくてはならない作曲家の一人といえます。当団でも過去に「交響的序曲」や「第 3 交響曲『悲劇的』」などを演奏しています。

さて、この作品はアメリカ陸軍バンドとその指揮者トーマス・ロートンディ大佐の委嘱によりに書かれました。作品は 2011 年に開戦から 150 年を迎えたアメリカの南北戦争 (1861～1865) に題材を求めた四楽章構成の交響曲で、2011 年 5 月 5 日に南北戦争が終結したバージニア州で作曲者自身の指揮で初演されました。南北戦争はアメリカ合衆国内の産業的な摩擦に端を発した内戦で、アメリカの北部 23 州と南部 11 州が 5 年間も争い、66 万もの尊い命が失われました。アメリカ国内には今もなお、その禍根が残っていると言われています。

この交響曲の第一楽章から第三楽章は南北戦争の中で最も凄惨だったと伝えられている三つの戦いを描いた叙事詩、最後の第四楽章は平和や栄光への賛歌となっています。いずれの楽章も雰囲気描写に終わるのではなく、主題となる旋律を持ち、その主題が展開されることで音楽が進められていきます。一方で、タイトルの「レクイエム」とは元々、キリスト教で死者の安息を神に祈る時の音楽を意味し、現在では宗教的な意味を持たない音楽においても「葬送曲」の意味で用いられています。このように「交響曲」と「葬送曲」の両方の性格が盛り込まれた壮大な音楽になっています。

第一楽章 プロローグ - ホーネッツ・ネスト (1862 年 4 月, シャイロー)

1861 年 4 月の開戦から一年。西部戦線では北軍が優勢な中、その戦いはテネシー州のシャイローに舞台を移していました。1862 年 2 月に大きな要所を失い、後退を続ける南軍を北軍は追撃します。しかし、北軍の動きが緩慢であることを察知した南軍は、4 月 6 日の未明、突如、奇襲を仕掛けます。驚いた北軍は後退しながらもホーネッツ・ネスト (直訳すると“スズメバチの巣”, “非常に危険な状況”を表す慣用句としても用いられる) と名付けた陣地を作り、防衛戦を始めます。7 時間の激しい戦いののち、ホーネッツ・ネストは陥落します。しかし、この間に南軍は将軍が戦死し、北軍は体勢を立て直し、翌日には北軍が南軍を破りました。この二日間の戦いはそれまでのアメリカの歴史の中で最も凄惨な戦いで、人々はすぐに収束することを願いました。しかし、このような戦いがまだまだ、向こう 3 年も続いたのです。

曲は独立から 100 年足らずで世界の列強の仲間入りを果たした 19 世紀前半のアメリカの

繁栄を表すかのような、輝かしいファンファーレを伴ったプロローグが奏されます。やがて、戦争を表現した快速な常動曲になり、スリルに満ちた緊張感の中、展開されていきます。戦争は凄惨さの中に終末を迎えますが、ますます混迷していった歴史の通りに、もう戻ることのできない繁栄の日々を顧みて第一楽章は終わります。

第二楽章 メアリーズハイツ (1862年12月, フレデリックスバーグ)

東部戦線では南軍の侵攻が続いていましたが、1862年9月、北軍はメリーランド州で一矢を報います。それに勢いをつけて、北軍が同年の11月にバージニア州フレデリックスバーグへと反撃に出ます。しかし、資材調達の遅れなどから南軍にメアリーズハイツという小高い丘の上に防衛線を張るための十分な時間を与えてしまいました。この迎撃準備の整った南軍に対して、北軍は何もない平原を通過して、正面から波状攻撃を仕掛けることを選択します。12月13日、厚い霧の中でこの無謀な作戦は決行されました。16の部隊が次々と突撃をしかけては砲弾の雨に散ってしまいました。この1日で約12,000名の死者が出たと言われています。

銅羅の一撃に始まり、重厚なサウンドでリズム動機と主題が提示されます。木管楽器のトレモロや金属打楽器の作り出す幻想的な雰囲気の中、もう一つの主題が提示されます。その後全合奏になります。多くの血が流れ、多くの兵士が無謀だと感じてでも作戦が中断されなかったのと同じように、二つの主題がただただリズム動機の上で繰り返されていきます。ホルンや中低音楽器の和声によって不安な感情が呼び戻されたところで切れ目なく第三楽章へとつながっていきます。

第三楽章 ロングストリートの突撃 (1863年7月, ゲティスバーグの戦いの三日目)

バージニア州のゲティスバーグは当時の交通の要所でした。しかし、ここを狙うと大規模衝突が起きてしまい膨大な犠牲者を出してしまうことが簡単に予想されたため北軍、南軍とも、互いに牽制していました。しかし、そのようにして高まった緊張感がいよいよ63年の7月1日に暴発してしまいます。これが南北戦争中で最大の激戦となった「ゲティスバーグの戦い」です。三日間にわたるこの戦いが転換点となり、北軍が優勢になったと言われています。

音楽はこのゲティスバーグの戦いの三日目の悲惨な出来事に焦点を当てています。この三日目、南軍のロングストリート将軍は戦場を中央突破する作戦を命じられます。ロングストリート将軍はこれに反対しますが、結局押し切られる形で遂行することとなります。南軍は1.6 kmにわたる横隊を組み、距離にして1.2 km離れた北軍陣地を目指します。しかし、当然のように北軍陣地にたどり着くまでに銃撃にあい、約12,500人の南軍の兵士たちの半分は北軍陣地にたどり着くことすらできませんでした。この惨劇は一般にはロングストリートの部下であったピケットの名前を冠して「ピケットの突撃」と呼ばれ、避けられたであろう悲劇の一つとして語られています。

第二楽章から切れ目なく演奏されるこの楽章では、冒頭で実際に南軍が使用したのと同じ信号ラッパの旋律が吹き鳴らされ威勢よく作戦の開始が告げられますが、それとは対照的なゆううつな行進が開始されます。信号ラッパの調子よさと死への行進のゆううつさが全くかみ合わず、混沌としていきます。この混沌がホール全体を包んでいくさまが、戦争のむなしさを大胆に表現しています。最終的には歴史の通り、音楽は死に覆われ、静寂に沈んでいきます。

第四楽章 アポテオーシス（1865年、アポマトックス）

南北戦争は1865年3月ごろ、バージニア州のアポマトックスに舞台を移します。ゲティスバーグの戦い以降、南軍は兵士の士気を取り戻すことができないまま敗走を続けました。そして、4月9日、この地で南軍の降伏をもって南北戦争は終結を迎えます。

アポテオーシスとは日本語では神格化と訳されます。音楽においては「主題を雄大に、何かを誉めたたえるかのようにした部分」という意味を持ちますが、本来の意味は「天体や自然、何らかの实在、個人、集団といった具体的な対象を神もしくはそれに類するものとして扱うこと」という意味を持ちます。この作品では両方を兼ね備えた内容となっており、作曲者が目指した「葬送曲と交響曲との融合」がこの楽章で実を結んでいると言えます。

これまでの下行に支配された陰鬱な主題とは異なり、上昇や昇華を想起させる主題がサクソフォーンのアンサンブルによって提示され、平和や安堵が表現されます。一つの国家が個人によって成り立ち、社会や文化が人の手から人の手に受け継がれていくのと同じように、一つの主題が楽器の組み合わせや調を変えながら綿々とくり返され、最後には変ホ長調の大合奏へと発展します。この変ホ長調という調はベートーヴェンやチャイコフスキーの作品で「英雄的」な性格を持つ場面で用いられています。この作品の「神格化」という性格を表すために必然的に選ばれた調なのかもしれません。

バーンズはこの作品についてこう語っています。

「交響曲を作曲する醍醐味は、自分が本当に伝えたいことを曲に乗せる機会があるということだ。アメリカで南北戦争が起こってから長い年月が経ち、この悲劇は人母とから忘れ去られている。しかし、これはまさにアメリカで起こったことであり、彼らの傷はまだ完全には癒えていないのだ。」

文：まちかね山吹奏楽団